～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

対面リーディング通信

2013年 6月

２０１３年６月1日 発行　　第１４９号（隔月刊）

～～

2012年度の統計がまとまりました

○件数について

２０１２年度の延利用者数は１,１４９件（９６件／月）で、１１年度より１０６件（人）増えました。

また、分類別利用合計１４３３件との差は１コマに複数の図書を希望されたためです。複数の希望は以前からありましたが、最近は利用記録簿により詳しく記入いただけるようになり、延利用者数より大きく伸びました。

○利用者数

実利用者数は昨年度より３人減り、４６名でした。その内、利用上位３名の延利用件数は７５２（1位：５１４、2位：１３０、３位：１０８）件で実に６５％を占めています。

従って、上位３名の利用状況により利用分類は大きく揺れることも考えられます。

○利用状況

２０１１年度と比較すると、「新聞」「文学・エッセイ」「資格試験問題」が約２倍になっています。反対に、「社会科学」が大きく落ち込んでいます。

また、「代筆」など生活に必要な書類などは少しずつ増えてきています。

「資格試験問題」が増え「社会科学」が減少しているのは分類に迷われた結果だと思われます。例えば「行政書士のテキスト」の場合、法律関係なので「社会科学」かそれとも「資格試験」なのかと。

分類に関しては内容で判断するのか形態で判断するのかなど、迷う部分があります。

また、分類を決めてから年月がたち現状とあわなくなった部分もあり、変更を考えています。ただ過去のデータとの比較も必要なので、古いデータとできるだけ比較できるように手直しをします。

○ボランティア数

１３４名（登録ボランティア数１４２名）のボランティアの方にご協力いただきました。

最近は、ご家族の看護で一時的に活動を中止される方も増えています。

今月号の主な内容

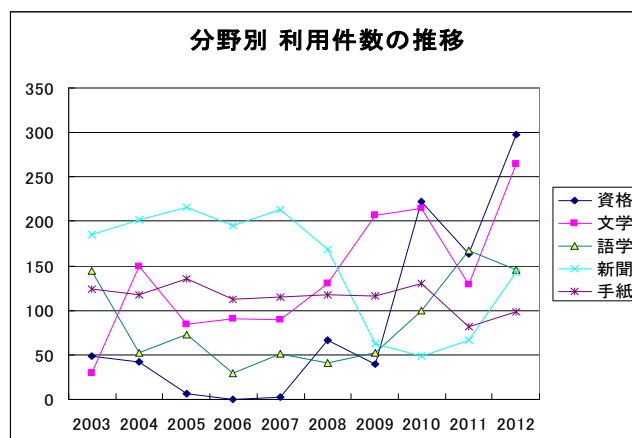
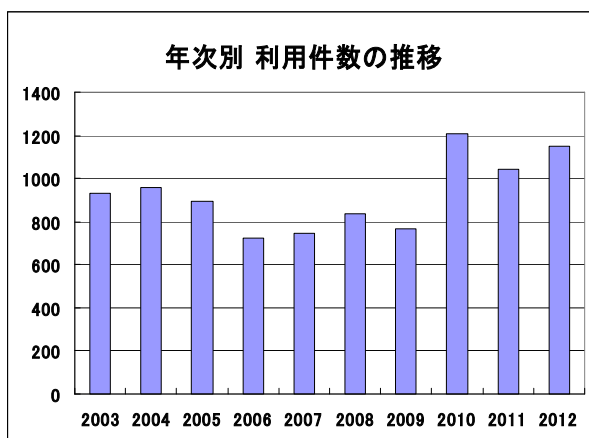
2012年度 対面リーディング利用状況報告

		分　　類	2012	2011
新聞・雑誌	１	新聞	１４３	６７
	２	総合雑誌	９６	８５
	１２	鉄道雑誌・時刻表等	３	１
	１３	スポーツ・スポーツ誌（競馬雑誌・相撲雑誌等）	３３	１３
人文・地歴・哲学・社会	４	哲学･心理学・宗教	３０	１９
	５	伝記・歴史・地理（旅行ガイド等を含む）	５９	３０
	６	社会科学（社会福祉・政治・経済・株式）	９２	１９３
文学・芸術	１４	芸術一般・芸能・音楽（楽譜等）	５６	３９
	１６	文学・エッセイ	２６４	１２９
	１７	短歌・俳句・川柳・詩	２１	１７
科学・医学・技術	７	東洋医学	０	５
	８	西洋医学	５	３
	９	数学・科学・物理・生物ほか	１３	４
	１１	工学（コンピュータ・無線等）	１	４
資格・検定・語学	３	資格試験問題	２９７	１６４
	１５	語学（英会話・TOEIC 等）・外国語	１４５	１６７
生活一般	１０	家事・育児・料理	３	２
	１８	各種取扱説明書（携帯電話等）	９	９
	１９	チラシ・手紙・ＤＭ・パンフレット等	９８	８２
その他	２０	代筆	４３	３６
	２１	コンピュータ補助（データ修正等）	１７	３
	２２	その他	５	５
合　　計			１４３３	１０７７
		実利用者数	１１４９	１０４３

年度別利用ベスト５

２０１２年度	２０１１年度	２０１０年度
① 資格試験問題 ② 文学・エッセイ ③ 語学・外国語 ④ 新聞 ⑤ チラシ・手紙など	① 社会科学 ② 語学 ③ 資格試験問題 ④ 文学・エッセイ ⑤ 総合雑誌	① 資格試験問題 ② 文学・エッセイ ③ チラシ・手紙・ＤＭ ④ 社会科学 ⑤ 総合雑誌

２００９年度	２００８年度	２００７年度
① 文学・エッセイ ② チラシ・手紙・ＤＭ ③ 総合雑誌 ④ 新聞 ⑤ 資格試験問題	① 新聞 ② 文学・エッセイ ③ 総合雑誌 ④ チラシ・手紙・ＤＭ ⑤ 資格試験問題	① 新聞 ② チラシ・手紙・ＤＭ ③ 総合雑誌 ④ 文学・エッセイ ⑤ 語学・外国語

2010	2009	2008	2007	2006	2005	2004	2003	分類
４８	６２	１６８	２１３	１９５	２１６	２０２	１８５	１
７１	８１	１２０	１０１	１０２	１０５	６９	１２９	２
５	３	１	３	４	４	３	９	１２
２	１	１２	１６	１９	１８	３３	１０	１３
２０	２２	１３	３１	１９	３５	１６	６２	４
５７	２７	９	１２	１２	１９	５７	３７	５
９３	４２	１３	３７	２２	５０	５７	１５	６
１５	８	１２	４	２７	４１	４３	１６	１４
２１４	２０７	１３０	８９	９１	８４	１５０	３０	１６
１３	１６	３０	２３	１８	２２	２０	１０	１７
４	３８	１１	８	２４	１０	１２	９	７
６	１９	２３	３	１１	２６	９	６	８
２	６	１	１	３	５	３	２３	９
１２	０	４	３	３	１	１０	２３	１１
２２２	４０	６６	３	０	７	４２	４８	３
９９	５３	４１	５１	３０	７３	５２	１４４	１５
６	２	２	２	１	２	０	４	１０
１９	６	７	６	６	１０	２４	２４	１８
１３０	１１６	１１８	１１５	１１３	１３６	１１８	１２４	１９
３７	１５	４０	１５	１８	２６	３３	１６	２０
２	３	１３	８	４	３	３	５	２１
１２９	－	－	－	－	－	－	－	
１２０６	７６７	８３４	７４４	７２２	８９３	９５６	９２９	

［注］資格試験の主な内容は
・法律関係の資格試験問題　・宅建関係の資格試験問題　・着物の着付け　です。

対面リーディングと私

失敗を糧に

難波（なんば） 美乃（よしの）

依頼された原稿を書くにあたり、一文字も書けていない真っ白な紙を前に溜息をつきながら思っています。「何も書けないのに、また安請け合いをしてしまった」と。

対面リーディングをさせていただいて、７年近くになります。仕事等の関係で音訳ボランティアや勉強会に挫折していた私は対面リーディングのお話をいただいた時、少しでも何かできるならとお話を請けました。それこそが安請け合いでした。その時は対面の２時間位なら時間も取れるし、家へ何かを持ち帰ることもないんだと簡単に構えておりました。お恥ずかしい話です。既に林曠子先生の講座で音訳やボランティアについて学んでいたのですが、まだまだ未熟であることをその後の対面で思い知ることになりました。

元々朗読が好きで、基本的な発音やアクセントを最初から勉強したいとＮＨＫ文化センターで林先生の講座に学んだのが、音訳ボランティアを知るきっかけでした。学生時代から放送部に所属し、演劇経験もある私は朗読には自信があり、正直なところ、高を括っていました。自由に好きなように表現することに慣れていたので、かなり戸惑いました。自分の悪い癖にも気付くのですが、なかなか治りません。多岐に亘る指導やボランティアに参加する機会もいただき、朗読・音訳の難しさや奥深さを知りました。それにもかかわらず、たった２時間位ならと思ってしまった、何という浅はかさでしょうか。

さて、いざ対面リーディングを始めると、案の定、色々と失敗をしでかしました。読んでいる途中で部首から漢字検索をする回数の多いこと。感動のお話ではリスナーさんより先に涙声でのリーディング。法律の判例集ではどの言葉がどこにかかるのかが読み切れず、意味不明に。歌劇の脚本では物語にはまり込み、演劇をしていた頃の悪い癖が出る始末。と、枚挙にいとまがありません。初見で意味を理解しながら、正確に読み、伝えることの難しさをあらためて痛感しました。さらに、読む力量だけではなく、幅広く豊かな教養も必要だなと感じました。

しかし失敗の繰返しにもかかわらず、こうして続けてこられたのは、２時間に凝縮された貴重な体験のお蔭です。リスナーさんとの出会い。雑談も含めての楽しい交流。新しい分野を読ませていただくことで広がる視野。そしてリスナーさんからいただく言葉。「探していた書類みつかって良かったわ！」「おもしろい読みだったよ！（きっと気遣って下さっているのですが…）」「お喋り楽しかったよ！（もはやリーディングではないけれど…）」等々。本当に感謝しております。

軽い気持ちで始めた対面リーディングですが、これまでの失敗を糧に得意なことにも苦手なことにも貪欲にアンテナを張り巡らせ、リスナーさんと共に充実した大切な時間を過ごしていけるよう取り組んでいきたいと思います。

情報発信

少しでもリラックスできる環境を

―心因性視覚障害―

サービス部　原田（はらた）　美貴（みき）

新年度、新しい環境、人間関係など、新しいことずくめで心身ともにお疲れが出た方もいらっしゃることでしょう。症状によっては「五月病」とも言われ、特に社会人一年生が経験するというイメージがありますが、深刻になるとうつ症状などが長引くこともあって軽視できません。最近では、職場や学校などにはカウンセラーが配置され、心の問題を個人だけのものとせず、社会全体で解決していこうと、丁寧に扱うようになってきました。それでも心の不調を訴える方は増加傾向にあるようです。

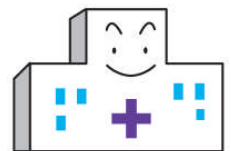
これらの不調は、最初は食欲不振、不眠、胃腸炎、などいう形で現われることが多く、不調を感じた時には病院を受診します。食欲不振が続けば内科、見えにくい時には眼科というように、私たちは症状のある部位を専門的に見てもらえる診療科を受診しますが、心の不調から現れた症状には、検査などしても原因がはっきりと分からず、治療ができないということもあります。

話は少し変わりますが、最近「心因性視覚障害」という記事を見かけました。眼には悪いところがないけれど、見え方に異常があるという症状のことです。視力低下、眼精疲労、色覚異常、羞明（しゅうめい：まぶしさ）、複視、眼球運動障害、斜視などの症状が現れるのに眼科的な治療が難しいというのです。この心因性視覚障害は子供や更年期の女性に多く、精神面の不安定さや人間関係など原因は様々です。このように通常の眼科的な治療ができない症状に対し、カウンセリングなどメンタル面からの治療を中心に眼科的な治療を行う「心療眼科」が関東を中心にできつつあります。内科的な治療を行う「心療内科」は今ではあちこちで見かけますが、それと比べるとまだまだ多くありません。それでも「心療」という言葉が付く病院は他科にも増えてきています。インターネットを検索すると耳鼻科や外科、整形外科など、全てに「心療」が付くのではないかというくらいです。今は心と体は切り離せないということなのでしょう。ストレス社会なんだなぁと改めて感じます。

最近は子供にも多い心因性の病気。今だから多いのか、今だから分かったのか詳しいことは不明ですが、大人も子供も気分転換は必要です。アロマテラピーやヨガ、ヒーリングミュージックなど「癒し」と言われているものを取り入れたりして、上手く心のコントロールをしていきたいものです。

個人的には癒し系アイドル！ではなく、癒し系の動物たちの写真など眺めながら、心の緊張を緩めてゆるゆると仕事に励んでいきたいと思います。

75.耳で読む新聞23年の回想

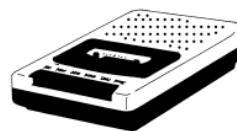
二村（ふたむら）　晃（あきら）

今年のゴールデンウィークは、阪神タイガースの連敗に泣くこともなく、為替相場の急変に慌てることもなく、無難に十日間が過ぎてくれました。むしろ、休みが終った後のタイガース６連勝や、１ドル102円の円相場に驚いている始末です。

例年のゴールデンウィークは、『ゴルゴ13』のデージー図書を楽しみに拝聴していたのですが、今年は残念ながら新作が送られて来ませんでした。その代りに、いつもお世話になっている吹田市の音訳グループ《とも》から、「結成30周年になるので、記念誌を秋のリスナー交流会までに発行したい。ついては、30周年に寄せる原稿をゴールデンウィーク明けには送ってほしい」とのご下命を頂いたのです。

漫画を読む代わりに、とんだ宿題を頂いたものですが、私と《とも》との交流は、もう23年になります。平成２年の秋、こちらで対面朗読をお願いしていた時、読んで下さった音訳ボランティアのＮさんに、「紹介したいグループがあるので、一度その研修会に出席してほしい」と言われ、梅田の阪急ビルの会議室に連れて行かれたのがそもそもでした。担当する会員が、１週間の新聞コラムと社説を中心に面白い記事を読んで、90分テープに収めて送って下さるとのことで、早速お願いしたのです。文字が読めなくなって、何より参ったのが、毎朝の新聞が読めないことです。長いお付き合いの始まりでした。

《とも》のテープは、　日本福祉放送の新聞朗読のような即時性はないが、時間をかけて読み込んだ魅力が溢れているのです。朗読者の声と技術だけでなく、温かい心をしっかり受け止めました。封を開けた瞬間に盲人への優しい心遣いが感じられます。パッケージの中央に点字シールで、「シンブン　コラムト　シャセツ」とあるのです。

テープからハイケンスのセレナーデが流れ出します。メンバーが家でとっている新聞を読むので、朝日だったり毎日だったり、読売の週やサンケイの週もあります。社説を全部丹念に読む人、夕刊からも話題を拾う人、記事に因んだ音楽を入れてくれる人……個性があって楽しい週替わりのプレゼントです。マレーネ・ディートリッヒが亡くなった時には、「リリーマルレイン」を聴かせて頂きました。忘れられない思い出です。耳で読む新聞、ゴチックも白ヌキもないけれど、音楽という武器があります。

藤井寺の音訳グループ《ひびき》が手がけているのは、朝日新聞の天声人語１カ月分を90分テープに収めた「タテに読む新聞」です。Ａ面とＢ面を朗読者２人が分担、校正者も付いて音質も良く、本格的な朗読作品です。また、川西市の音訳グループ《ＲＴ川西》が手がけるのは、読売新聞の編集手帳。15日分がＡ面に入り、Ｂ面にはエッセーや、面白い記事が入っています。15日刻みで、テンポが早いのが嬉しいですね。

ところで、《とも》のテープを聞いていて気になった読みが一つありました。
「折からの微風に乗って、桜の花びらが……」「ビフウにのって」と読まれたのですが、「そよかぜ」と読んでほしかったですね。桜の花びらを運ぶ風です。よろしく！　〈続く〉

私のふるさと

職員紹介

ふるさとって

総務係　**曽禰 一子**

　ふるさととは、自分の生まれ育った場所であるとすると、私のふるさとってどこ?、と考えてしまいました。

　というのも、生まれは大阪府高槻市ですが、半年ほどで、父の仕事の転勤でその後は基本的に２年置きに引っ越しして子ども時代を過ごしました。

　まず、東京都東村山市へ移りました。その後、千葉県習志野市、山梨県甲府市、大分県大分市、岐阜県岐阜市、茨城県水戸市、京都府京都市、神奈川県川崎市を転々とし、高校入学のときに大阪に戻ってきました。なので、小学校は４校、中学校は２校通い、転校するのは普通のように育ったわけです。今のようにいじめが社会問題になっている時代ではありませんし、子どももあふれていた時代でしたので、転校生も多い学校が多かったことも幸いしていたのか、転校することが苦になったことはありませんでした。むしろ、祖父母の要望で急に父の実家の大阪府豊中市へ戻ることになったときは、神奈川県での高校入試を決めた後でしたので、がっかりした気持ちでいっぱいでした。

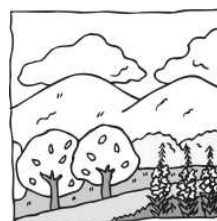
　そんな私が懐かしい所というと、水戸でしょうか。小学校４年の２学期から６年の１学期にかけての２年間を過ごしました。

　当時、お土産のお菓子をよくいただきましたので、今はそのお菓子をみかけると、懐かしく想い出します。

　まず、「水戸の梅」という銘菓です。白あんを求肥（ぎゅうひ）で包み、さらに蜜付けの赤紫蘇の葉でくるんだものです。子どもの私にとっては紫蘇の香りが大人を感じさせるちょっと背伸びした甘酸っぱい思い出です。「のし梅」というゼリー風のお菓子もあります。竹皮に挟んだ薄くのした梅ゼリーの爽やかな酸味が懐かしく思い出されます。水戸は徳川御三家のひとつで、偕楽園という日本三名園のひとつを有します。その偕楽園には梅四千本が植えられ、その梅の開花が春の訪れを告げてくれます。だから、梅にまつわるお菓子が多いのです。

　水戸の気候は、冬は大阪より厳しかったと思いますが、快晴の日が多く、からっとしていた印象があります。過ごしやすい土地柄だったと思っています。夏は海水浴に大洗や日立の方へ出かけました。太平洋に面した外海なので、海は広く波は大きく海水は冷たい記憶があります。このまま流されたら、アメリカまで行けるのかな、と子ども心に思いを馳せました。

　関西に住んでいると茨城県は遠く感じられ、「故郷は遠きにありて思ふもの・・・」という室生犀星の詩にあるよう、離れているからこそ、懐かしく思い出すのでしょうか。そんな場所をふるさととは呼べないのかもしれませんが、私を育てた場所のひとつではあるのです。一度は訪ねてみたいです。

情報発信

日本ライトハウス養成部の紹介

養成部　田邉（たなべ） 正明（まさあき）

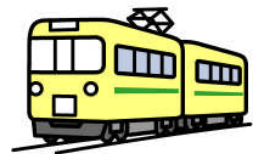
放出にあります日本ライトハウス視覚障害リハビリテーションセンターには養成部という部署があります。主な業務は厚生労働省から委託を受けた、「視覚障害生活訓練等指導者養成課程」という、視覚障害者の指導者の養成を２年かけて行う役目です。今年で４３年目を迎え、全国の視覚障害者施設や盲学校に修了生を送り出してきました。

その内容は４月から９月までは白杖を使った歩行訓練をアイマスクをして行います。まず館内を伝い歩きという方法で壁を手で伝って歩くことから始め、屋外には白杖を使って日本ライトハウスから駅まで一人で歩けるように訓練します。そして電車に乗り、大阪駅や天王寺駅までアイマスクのまま一人で行くように練習するのです。

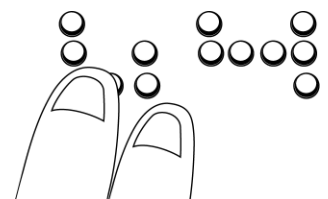
一般的に杖というと、足腰が弱くなって自分の体を支えるために使うので、だいたい腰の高さぐらいの長さのものを使いますが、白杖は体を支えるのではなく、体の前にある障害物を探知するために使います。そのために自分の体の前方を肩幅よりも少し広く左右に振りながら歩くという動作をします。ですから、視覚障害の方に白杖を与えるだけでなく、使用方法の練習が必要なのです。訓練する人たちは歩行訓練士という名称を用いています。この呼称は認定された資格ではありませんが、養成課程を十分な成績で修了された方々を指しており、現在全国に約５００人程度います。

１０月からになりますと、点字や音声が出るコンピュータ、ロービジョンの補装具である弱視レンズなどの訓練が始まります。点字というとボランティアの方々が点訳をするものというイメージがあると思いますが、点字は触って読むことができて初めて役に立つものですから、養成課程ではアイマスクをして点字を触読する方法を学習し、触読の指導方法を練習するのです。

虫眼鏡は文房具店にもたくさん売っていて、大きくなることはおわかりかと思いますが、ロービジョンの方々が適切に文字を拡大するためにはどのようなレンズが必要なのかも知らなくてはなりません。そのほか音声を使ったコンピュータの練習、調理に使用する便利グッズの紹介など、覚えることはたくさんあります。

養成部は指導者の養成を行うとともに、宝塚市、奈良県、堺市、和歌山県から視覚障害者のための訓練も委託されていますので、訪問指導に出かけ毎日ジプシーのような生活をしています。一日に歩く距離は多い日で13km、移動距離は200km にもなります。視覚障害の方々の最前線で働くとともに、その普及にがんばっていますので、応援してくださいね。

寄り道・回り道

レポーター：中川　亜希子（なかがわ　あきこ）

バーアンドジェラトリア　ラッフィナート

BAR&GELATERIA RAFFINATO

【所在地】　大阪市北区中之島2-3-18 フェスティバルプラザＢ２Ｆ
【TEL】　06-6228-3444
【行き方】　地下鉄四つ橋線「肥後橋」駅下車４番出口　情文から 150m
【営業時間】　8:30～23：30【モーニング】8:30～10:00【ランチ】11:00～15:00
【URL】　http://raffinato-ashiya.com/

今回はこれからの時期においしくなる、イタリアンジェラートのお店をご紹介します。

場所は、このコーナー担当の今村氏が挑戦しようとしている「あの」塔の頂上･･･の正反対、地階の端にあります。

JR 芦屋駅の人気イタリア料理店が2年の歳月を経て企画して、フェスティバルタワー開業と同時にオープン。ライトハウス本館から、地下鉄入り口を降りて、地下続きで歩いて5分。雨の日も傘いらずの利便性。朝は出勤時の8：30から開いていて、夜は23：30まで。バーというだけあって、カフェメニューだけではなくワイン、スプマンテなどのお酒も用意されているので、ジェラートと一緒におしゃれにお酒も楽しめます。

メニューは大きく分けてジェラート、パニーニ、飲み物なのですが、なんといってもジェラートが一番のお勧めです！素材を厳選してシェフが作る本格ジェラートは一、話の種に一度は食べてほしい一品です。

特に、季節ごとに店頭に並ぶ、”プレミアムフレーバー”は、追加料金は発生しますが、その時期しか食べられないプレミアものです。

オープン当初に行ったときには生トリュフの入ったフレーバー（追加料金＋500円）などの高級フレーバーも出ていました。この記事を書いているときには今は「和歌山の清美オレンジ」「土佐・文旦」「愛媛・西宇和で採れた国産のブラッドオレンジ」などが並んでいます。

これらのジェラートと一緒に、バリスタの入れてくれたカプチーノで優雅なティータイムなどはいかがでしょうか？

モーニング：パニーニ+カフェ（500円～）
ランチ：パニーニ＋カフェ（700～）
パニーニ＋カフェ＋サラダ（850～）
セットに追加（+300）2種盛り、（+400）3種盛りのジェラートを追加。
ジェラート＋カフェ（700円～）

昭和の大横綱　双葉山 定次 (ふたばやま　さだじ)

対面リーディング・ボランティア　望月 明（もちづき　あきら）

■明治４５年、大分県に生まれる。５歳の時、友人が吹いた矢が当り、右目はほぼ失明状態だったと言われる。それにも関わらず、史上稀に見るほどの圧倒的強さを誇ったことから『史上最強の横綱』『相撲の神様』『昭和の角聖』と讃えられている。現役中の偉大な実績から、『双葉山』のしこ名は、現在、後の力士が名乗ることができない“止め名”となっている。

■通算成績：３４８勝１１６敗３３休
勝率.７５０。
横綱成績：１８０勝　２４敗２２休
勝率.８８２。横綱在位１７場所。

■７０勝ならずの一番

１９３９年1月１５日、初日から4日目まで実況中継を担当した和田信賢は『不世出の名力士双葉山、きょうまで６９連勝。果たして７０連勝なるか。７０は古希、古来稀なり』とのアナウンスで放送を開始した。対戦相手は前頭４枚目の安藝ノ海。

この取り組み前、双葉山が連勝記録を更新し続ける中で、出羽一門では「打倒双葉」を合言葉に、笠置山を参謀に日々双葉山に対する戦略・戦術を練った。笠置山は当時としては珍しい大学出身(早稲田大学)の関取で、自身が記した「横綱双葉山論」では、双葉山の右目が半失明状態であることを知っていたことから、対策の結論として「双葉の右足を狙え」とした。

この右足対策を十分に身に付けたまま、安藝ノ海は本番を迎えた。安藝ノ海は立会いから双葉山を寄せ付けようとしなかったが、双葉山の右足に対して左を掛けた。両者の身体が大きく傾いたが一度堪えた後、双葉山が安藝ノ海の身体を担ぎあげるようにして外掛けを外し、再度右から掬い投げにいったので、安藝ノ海の身体は右側に傾きながら双葉山と共に倒れた。

双葉山の身体が先に土俵に付いていたため、双葉山の連勝は６９で止まり、安藝ノ海は金星を挙げた。実況を担当していた和田は、４日目に連勝が途切れるなどとは当然予想しておらず、双葉山が倒れた時に、控えのアナウンサーに対して『双葉負けたね!?確かに負けたね!? 』と確認してから『双葉山敗れる! 』と叫んだ。しかし、万一双葉山が敗れた場合に備えて用意していた言葉は霧散し、ただマイクに向かって何度も「双葉山敗れる!」を繰り返したと自著に記している。

■取り口、強さなど

どんな相手に対しても、同じような態度で臨んだ。力水は一回しかつけず、自ら“待った”をかけることはなく、相手力士がかけ声を発すれば制限時間前であっても、１回目の仕切でさえ受けて立った。そして、１度目で立った相撲でも見事に勝っている。こうした土俵態度も、今日まで力士の模範とされている。

■エピソード

右目の状態は、入門から入幕の頃にかけては、かすんだり、物が二重に見えたりしていたが、やがて、ほとんど見えなくなったとい

う。なまじ見えるよりその方が都合が良かったと、当人は後に語っている。対戦力士の側にも「あの人は目の前の相手と違うものを見て相撲を取っている」といった証言が多く残る。実際、双葉山の右目はやや白濁しており、右目に白い星があった。そのことから、相手は“神眼”だといって恐れたという。

ちなみに、横綱昇進後に喫した２４敗（うち不戦敗が１つ）は、安藝ノ海に６９連勝を止められた一番を含め、大半が右側から攻められてのものである。右目が見えないことは公表されていなかったが、櫻錦に敗戦したとき、飛び違いという決まり手であったことから、“双葉山は目が悪いのではないか”という噂が広がった。なお、笠置山の談話によると『我々は皆、双葉山の右目のことを知っており、当然そこを狙って作戦を立てていた』という。

■双葉山の名言

＊『稽古は本場所のごとく、本場所は稽古のごとく』

常に真摯な姿勢で相撲道と向き合い続けた双葉山の言葉は、強い説得力を持っていたことは想像できる。その双葉山が親方となり、弟子たちに説いていたのがこの言葉である。「稽古は本場所のように緊張感を持って取り組むように。本場所では硬くならず、リラックスして臨みなさい」という意味と考えられるが、あえて最小限の言葉に抑えることにより、弟子たちへの押し付けではなく、個々の自覚を促す教訓に聞こえる。技術面を口にせず、「**心気体**」を相撲道の理念とした時津風親方(双葉山)を象徴する言葉の一つである。

＊『心・気・体』

一般的にスポーツの世界では「**心技体**」が重要な理念であるとして知られているが、双葉山は相撲道の理念として「心技体」ではなく、「**心気体**」が重要であると説いた。また、双葉山が目指した「**木鶏**(もっけい)」こそ、この「心気体」の象徴であったと考えられている。

稽古場での時津風親方(双葉山)は、ほとんど技術面のことを口にせず「稽古は本場所のごとく、本場所は稽古のごとく」を指導理念とし、「心技体」ではなく「心気体」を強調していた。

師匠(双葉山)が稽古場に現れると、私語を交わす者は誰一人となく、体と体がぶつかり合う音と荒い息遣いが聞こえるばかりで、その指導力は優れていたという。双葉山は亡くなるまでの２５年間親方を務め、一横綱、三大関を含む多くの関取を育成した。

＊『われ　いまだ木鶏たりえず』

７０連勝をかけて臨んだ昭和１４年１月場所４日目、約３年間勝ち続けていた双葉山は、ついに安藝ノ海によって黒星を喫する。双葉山はいつもと変わることなく、土俵に一礼をして東の花道を下がって行ったが、その日の夜、知人に宛てて打った電報がこの言葉である。

「**木鶏**」とは、中国の故事に由来する言葉で、木彫りの鶏のように全く動じることのない最強の状態にある闘鶏を指している。無心の境地に至れなかった自分を戒めた双葉山だが、相撲道に対する更なる精進を重ね、連勝記録がストップした後も、３度の全勝優勝を含む７度もの優勝を数えることとなる。

＊『後の先』

双葉山は生涯一度も“待った”をしなかったという。立ち会いでの相手を受けて立つ姿勢は、一見立ち遅れているように見えるが、組んだ時にはすでに先手を取っており、「**後の先**」と呼ばれている。

双葉山の右目は、幼い頃の事故でほとんど見えない状態であった。しかし、双葉山は現役時代、そのことを誰にも悟られぬようにして土俵人生を全うしている。立ち会いに「待った」をせず、「**後の先**」を完成させたのも、自分のハンディを乗り越えるために生み出されたものであった。

＊『勝負師は寡黙であれ』

前人未到の６９連勝など、土俵上では無敵

を誇った双葉山であるが、“失明となった右目”と“事故で潰してしまった右手小指”という2つのハンディを負っていた。しかし、現役中それを決して他人に語ることなく相撲を取り続け、引退まで黙り通している。
大きなハンディを乗り越えるため必死の努力を続けてきた双葉山のこの言葉は、勝っても、喜ぶ姿を相手に見せることがなかった“双葉山の土俵哲学”と言われている。

お断り:以上の内容は、Wikipedia 他のHPから抜粋要約したものです。

木村　謹治

眼底検査を受けていますか

五官という言葉がありますが、人は環境からの情報の 90% を視覚的に得ていると言われています。
また、『産業教育機器システム便覧』によると、五官による知覚の割合は視覚器官が83%、聴覚が11%、臭覚3.5%、触覚1.5%、最後の味覚が1.0%、であるとしています。
何れにしても眼は大事な器官に間違いありません。
そこで、時々検査したいことは、白い壁に向かって片目ずつ見て下さい。黒い虫のようなものが動いて見えたら飛蚊症の疑いがあります。大半は問題がないのですが、やはり気をつけたいですね。
次に片目ずつ景色や文字を見て下さい。両眼では補完しあって気がつかないことが多いですが、片目で見ると景色や文字が欠けて見えるとこがあります。もし欠損していたらすぐに眼科で相談して下さい。
さらに眼の横で両手を広げ、眼を動かさずにどの範囲まで見えるかの検査です。見える範囲が狭いと視野狭窄の疑いがあります。

そして、完璧をきたすために眼底検査をしませんか。痛くもかゆくもない病気ほど怖いものはありません。
眼底検査で、緑内障・網膜動脈硬化症・糖尿病性網膜症などがわかります。
特に、緑内障は自覚症状が出たときには、すでに神経線維の70～80%が死んでいる非常に怖い病気です。死んだ神経線維は決して生き返らないため、視機能が回復することはありません。進行性の病気ですので必ず悪くなります。失明原因の第2位で年間2000人が失明しています。早期発見が大事で、早期に治療すれば失明には至りません。

▼やはり地球は温暖化しているのでしょうか▼アメリカのハリケーンの猛威はすごいですね▼もうすぐ梅雨▼警報が出た場合は休んで下さいね　K

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6441-0015（代表）
06-6441-0039（サービス部）